

中国人留学生の江別・南京の学習生活ギャップを
うめるための両国間映像制作プロジェクト

安田 光孝 田中 英夫
竹内 典彦 大島慶太郎
北海道情報大学

Filling the Gaps in the School Life for Chinese Students
by Exchanging Video Making Project between Ebetsu and Nanjing

Mitsutaka YASUDA, Hideo TANAKA, Norihiko TAKEUCHI
and Keitaro OSHIMA
Hokkaido Information University

平成24年11月

北海道情報大学紀要 第24巻 第1号別刷

〈報 告〉

中国人留学生の江別・南京の学習生活ギャップを うめるための両国間映像制作プロジェクト

安田光孝^{*,**} 田中英夫^{*} 竹内典彦^{***} 大島慶太郎^{*,**}

Filling the Gaps in the School Life for Chinese Students by Exchanging Video Making Project between Ebetsu and Nanjing

Mitsutaka YASUDA^{*,**} Hideo TANAKA^{*}
Norihiko TAKEUCHI^{***} Keitaro OSHIMA^{*,**}

1. 背景

本学は、中国の南京大学と国際交流協定を結んでおり、毎年 20 名程度の留学生を受け入れている。平成 22 年 4 月に編入した留学生は既に 4 期生ともなり、その受け入れの取り組みは成果を上げてきたといえる。だがその一方で、両大学にとっても、あるいは、留学生・本学生にとっても、まだ解決すべき課題は残っていると考える。

安田と大島（慶）は、ゼミナールの学生として、毎年、留学生を受け入れてきた。また、本共同研究者のうち 3 名は、編入試験を実施するために南京大学に赴き、南京での日本語教育の現場とそこで勉強する学生を見てきている。田中は特に南京大学と密接な交流を持ち、留学生の実状を熟知している。その中で留学生から聞こえてくる声は、南京での 2 年間と江別での 2 年間の学習生活のギャップ（違い）が相当大きいものであるということである。

2. 研究の概要



図1 プロジェクトの全体像

本研究では、学生による映像制作プロジェクトを江別と南京両方で立ち上げる（図1）。江別では本学での学習や生活を、南京では出張講義を行なって、南京大学の学習や生活をドラマ形式で数本、制作する。完成した映像は本学の日中動画交流サイトにて公開する。これらの映像作品と動画交流サイトを通じて、双方の生活環境と文化の違いを促し、理解を促し、留学生に与える南京と江別のギャップを少しでも埋めようと試みた。また、南京大学の留学生がプロジェクトを通して、中国にいる早いうちに、日

* 情報メディア学部 情報メディア学科
** メディア・クリエイティブ・センター
*** 経営情報学部 先端経営学科

本の大学教育システムを理解し、また江別での生活のイメージを具体的に醸成させることにある。

本研究での映像制作は、両国ともプロジェクト型教育の手法を用いて行う。昨今、本学の特にデザイン分野の教育では、モノ作りの裏に潜む暗黙知の部分を育成するために、PBL (Project Based Learning : プロジェクト型学習) を積極的に取り入れている。それを外国語学習も絡めて適用する。外国語で映像を制作することは、カメラを操作して、映像をとり、編集するモノ作りの能力以外に、他言語でシナリオを作成する翻訳・作文能力、チームでディスカッションする交渉能力、役者としてセリフをしゃべる会話能力などの様々な言語能力とコミュニケーション能力が必要となる。このプロジェクトを通して、それらの能力を向上させることも、目標のひとつである。

3. 研究の特色

本研究の特色は、日本と中国の二国間で、それぞれが相手の言語を用いた映像制作を行い、Web を媒介にして、それらを相互に交差させる試みを行うことである。つまり、本学での教育と生活、南京大学での教育と生活を学生それぞれが学生の視点で表現し、相互に理解を深めるしくみを構築する。また、本研究では本学の教員が、南京へ赴き、実習講義を行う。これは本学初の試みとして、南京大学の学生が来日する前に、映像制作の講義を通して、日本の大学教育の一端を見せることを実現するものであり、また、映像制作プロジェクトを通して、本学教員と日本語での直接対話の機会を設けるものである。

4. プロジェクトの実施

4.1 事前調査

映像制作を進める前に、南京大学からの留学

生が日本に来る前と来た後で、大学生活にギャップ (想像していたことと違うこと) を感じているのか、またどのようなことで困っているのかを調査するため、平成 22 年 6 月にアンケートを行った。アンケートは、南京大学外国語学院 IT 日本語クラス 4 期生にあたる 3 年次編入生の 15 人に対して、行った。「北海道情報大学に来る前と来た後で、ギャップがあったか」という問いに対して、20% (3 人) が「とてもあった」、47% (7 人) が「少しあった」と答えた。「情報大学に来た後で、困ったことがあったか」の問いには、40% (6 人) が「とてもあった」、53% (8 人) が「少しあった」と答えた。以上の結果から、留学生にとって、本学に留学する際にほとんどの学生がギャップを感じていることと、困ったことがあることが分かった。また、「留学する前、情報大について知っていたか」の問いには、87% (13 人) が「少し知っていた」、13% (2 人) が「ほとんど知らなかった」と答え、「留学する前、日本の大学教育のやり方について知っていたか」の問いには、60% (9 人) が「少し知っていた」、40% (6 人) が「ほとんど知らなかった」と答えた。以上の結果から、本学における教育や生活について、「とても知っている」学生は、皆無であることが分かった。

4.2 本学での映像制作

本学での映像制作は、南京大学からの留学生で、本学 4 年生 (平成 22 年度当時、以下同じ) の楊樂君を制作チームのリーダー及び映像監督として、制作を行った。まず、楊君が、前述のアンケートをもとに留学生が日本へ留学する前に知っておくべき知識、習慣、施設、日本語フレーズなどを洗いだして、キーワードとしてまとめ、そのキーワードに基いて、短編映画の脚本を日本語で書いた。全部で 30 種類ほどの脚本を用意し、共同研究者の竹内が脚本の確

認を行った。7月から、2人の日本人学生(4年黒田学君、3年牧野隆太郎君)を撮影班とし、撮影を開始した。留学生7人(修士2年呂春意君、4年呉涛君、王笑然君、周文君、是シンカイ君、包齊君、張玉林さん)、数名の日本人学生、共同研究者の竹内、安田を役者として、それぞれの作品を撮影していった。その後、楊君が編集を行い、最終的には、2分程度の短編映画20本が完成した(図2)。作品の下部には、中国語の字幕を用意し、日本語がまだ分からない学生でも内容が分かるよう工夫した。字幕については、共同研究者の田中の指導のもと、修士1年陳敏潔さんに、中国語表現を確認してもらった。また、映像の最後には、その作品で使用したよく使う日本語キーワードの説明と使用する上での注釈をつけた。



図2 本学での映像作品



図3 南京大学での出張講義風景

4.3 南京大学での映像制作

南京大学 IT 日本語クラスでの映像制作は、研究代表者の安田と大島(慶)、学生補助として4年楊楽君、査露さん、3年李鵬飛君が11月に南京大学に赴き、実施した。また、同時期に共同研究者の田中が別の目的のため、南京大学に来ることになったため、一緒に撮影に加わることになった。映像制作は、「特別映像制作講義」として、ワークショップ形式で行われた(図3)。もともとは10日間の講義を行う予定であったが、尖閣諸島の問題で、中国各地で反日デモが起こっていた時期だったため、5日間に短縮することになった。また、南京大学のキャンパスにて映像を撮影し、南京大学を題材とした映像を撮る予定であったが、撮影は教室のみで行うこととし、テーマも急遽、田中が別で行っていた日本語特訓講義の教材にあわせて、「面接時のマナー」とした。映像制作の対象は南京大学外国語学院 IT 日本語クラスの5期生23名を対象に行った。5期生を3つのチームにわけ、それぞれ5本で計15本、面接時のマナーの悪い例と良い例の映像を制作した。



図4 南京大学での映像撮影風景

講義後、アンケート調査を行ったが、97.5%の学生が「講義が役に立った」と答え、95%が「この講義が再度開講されることを望む」と答えた。自由記述欄には、北海道での学習生活が

分かった、もっと専門課程を勉強したい、チーム作業は重要であるなどのコメントがあった。

この特別講義には、映像作品をつくる以外にも、別の目的があった。それは、南京大学生が本学に留学する前に、本学の講義の形式（特に実習とチームプロジェクト）を経験すること、南京大学生と本学教員との直接的な交流、日本語での講義による日本語力の向上などであったが、その全てにおいて、良好な結果が得られたと考える。



図5 本学と同じチーム形式での講義

4.4 映像交流サイトの開発

本学と南京大學で制作した映像をインターネットに上げ、日本と中国の両国から互いに映像が閲覧できる Web サイト「北海道情報大学×南京大學 日中動画交流サイト」を開発した。開発は、4 年阿部裕介君を中心に行った。映像交流サイトを開発するにあたり、オープンソースである「PHPmotion」を使用した。

「PHPmotion」は、動画の閲覧、アップロード機能だけでなく、検索やタグづけ、コメント機能などを備えている。また、テンプレートによるデザイン変更の容易さや、レイアウトの柔軟性等も考慮した。4 月の公開時には本学で制作した 20 本の映像作品と南京で撮影した 15 本の映像作品を登録し、今後も容易に映像を追加できる。



図6 日中動画交流サイト

また、メニューとして「情報大学紹介」「南京大學紹介」「情報大学 Q&A」「南京大學 Q&A」を用意し、閲覧者の興味から映像を探すことができたり、「情報大学 MAP」「南京大學 MAP」のように、地図から映像を探すこともでき、より各大学の様子がわかるよう、工夫した。この映像交流サイトは、

<http://mccprj2.do-johodai.ac.jp/video/>
にて公開されている。

5. 終わりに

本研究は、本学と南京大學とで映像制作を行うという共同研究としては、初めての国際的な試みとなった。本研究の最終的な成果は、現在公開されている「北海道情報大学×南京大學日中動画交流サイト」が、今後どう閲覧され、発展していくかによっても大きく左右される。しかし、その土台と仕組みは本研究で完成し、また、制作された映像を閲覧することにより、双

方の学生が、双方の大学での学習や生活を具体的にイメージするためのひとつの手段が構築されたと考えている。特に本学で制作した映像を見れば、本学の施設や教室の雰囲気が中国にいる南京大学の学生に、今まで以上に伝わるのではないか。また、本研究において、本学の教員が南京大学に赴き、本学の講義をそのまま中国にて実施したことは、大きな意義があると考ええる。それは、南京にいる留学前の学生が本学の講義の体験をし、直接教員と話し、共にひとつの目標に向かい、共同作業を行ったことは、日本への留学に対し、留学生により刺激とモチベーションを与えたのではないかと考えられるからである。

謝辞

本研究は、平成 22 年度北海道情報大学学内共同研究補助金を使用して、行われました。関係各位に感謝申し上げます。

参考文献

- [1] 北海道情報大学, 南京大学外国語学院: IT 用語日英中ハンドブック, 南京大学出版社 (2010)
- [2] 守谷三千代他: 総合日語 第 1・2 冊, 北京大学出版社 (2004)
- [3] 北京外国語大学日語系: 基礎日語教程 第 1・2 冊, 外語教学与研究出版社 (1998)
- [4] 西住 奏子: 新規渡日中国人留学生向け映像教材の開発と試行, 国際教育 第 3 号 (2010)
- [5] 中野裕也他: デジタル動画映像による中国語初級補助教材の制作, 東京工科大学研究報告 1 (2006)
- [6] 諏訪 哲郎, 斉藤 利彦, 王 智新: 沸騰する中国の教育改革, 東方書店 (2008)
- [7] 澤谷 敏行: 大学教職員と学生のための中国留学・教育用語の手引き, 関西学院大学出版会 (2010)